

ダービーが終わったといっても一年の半分弱が過ぎたにすぎず、四歳馬たちにしたって菊花賞に向かって再スタートを切ったわけなのだからこんなことをいってはほんとうはいけないのだが、ダービーが終われば一年が終わったような気がしてしまうのはぼくだけではあるまい。馬だって激戦がつげば放牧へ出されるのだから、ぼくもちょっと福島の温泉プールで療養にいきたい気分だ、メジロアルダンが戻ってくるそうだから空席があるんじゃないだろうかといながら、宝塚記念を見に大阪まで出張しようとしてしまう我々のことを人は「大馬家もの」と呼ぶのである。

もう何度も書いたことだけれど、昨年の六月十日ぼくが参加しているグループのペーパー馬主のドラフトでメジロライアンを一位指名しその場で「ライアンは皐月賞を追いこんで届かず、人氣が落ちたダービーで圧勝する」と言ったことからはぼくの今年のダービーはじまった。ちなみに、その断言には八月段階で「未勝利を脱するのに手間取るが、距離延びてからは連勝して皐月賞を迎えるであろう」という部分も加えられていたのだから、その予言がおそろしいほどの的中しただけの時のぼくの興奮ぶりはわかっていただけるものと思う。レースの度にパドックで体を見ては「落ちつきがない」「まだ太い」だの「子供っぽい」だのと愚痴をこぼし、京都まで未勝利を使いにつ

た時には無理をしすぎるのではないかと不安がり、ローテーションをあれこれ考え、どこか大家の坊っちゃん風の性格に「こいつは気がよすぎて接戦に弱いかもしれないなあ」と吹き、まるでライアンのスタッフか関係者みたいに勝手にいれこんでいるうちに、ライアンがほんとうにクラシックの王道を歩みだし、あれこれ吹いていることが他人にも知られて同じことを雑誌や新聞にも書き、そうこうするうちに気づいた時には一年がたつてしまっており、ようやく第57回のダービーにたどりついたのだ。

さて、「優駿」の読者の方々ならどうぞんのごとく、実際にもしくはテレビでレースはご覧になっていらっしやるだろうから、ここで詳しく書く必要はあるまい。素晴らしいレースだった。それがダービーであることからくるとうぜんの素晴らしさを超えて、作家の一つの作品にも似たレースであったとぼくは思う。強く速い馬が完璧なレースをしてダービーを勝つということはあんなにも美しいことなのだ。ハクタイセイの武豊の騎乗ぶりには批判もあるが、あのままではアイネスフウジンに逃げられると判断して一か八かの勝負に出た武豊の作戦は責められない。あれで勝てなければどう乗っても勝てないはずだ。ハクタイセイのファンも二着をひろいにくくレースをのぞんでいたわけではないだろう。メジロライアンに因するというなら、横山典弘の騎乗も完璧だったと思う。ただ、ああいふレースでは完璧以上でなければ、1200パー

セントの騎乗をしなければ勝てないということなのだ。横山がアイネスフウジンを自力で倒さなければ勝ち目はないと見て三コーナーあたりで競りかけていく戦法に切りかえたなら、あるいは二コーナーでもうハクタイセイと並んで追撃し四コーナーで内を回って一気に先頭になつていたら、歴史は変わったのだろうか。もちろん、それは過去のライアンのレースぶりからは想像できない作戦だし、それによってライアンは惨敗してしまう可能性の方がずっと大きかったのかもしれない。ぼくはアイネスフウジンがゴールインした瞬間、加賀武見のクライムカイザーが四コーナーで一気に先頭に立つという奇襲戦法でトウショウボーイを破ったダービーを思い出したのだ。アイネスフウジンが圧倒的なスピードで逃げきった第57回ダービーは競馬ファン全員

の目に鮮やかに焼きついている。だが、そうであったかもしれないもう一つの第57回ダービーが、すべての競馬ファン一人一人の胸にそれぞれ違った形で刻み込まれていることも事実なのである。ところで、今回のダービーに関してはレース外のことにも触れておかねばならないだろう。競馬の環境が急激に変わっていく一つの象徴的な例でもあるあの「ナカノ・コール」のことだ。春の天皇賞は、武豊のスーパークリクが勝った。その時、京都競馬場にいたぼくはとんでもない感じがした。それはレースが終わったのに、観客がまだだれも終わつたような顔をしていないというこ

とだった。観客はずっとターフビジョンに映しだされているスーパークリクと武豊を見つめていた。凱旋する瞬間を待ちつづけていたのである。武豊はそんな観客の気持ちを見ぬいているかのよつに、ほんとうにゆつくりと戻ってきた。そして、長く大きな拍手が巻きおこつたのだ。そこから、ダービーで勝者の名前を連呼することまではあと一歩の距離しかなかったのである。

若い新しいファンの大量の流入は競馬場の雰囲気を変えつつある。そんな中の一部に傍若無人な態度をとる若者がいることも事実だし、そのことについてはどうやら見ぬふりを決めこんでいるらしい競馬会にも問題はあつた。常識がないなら教えてやればいい。それが大人の役割なのだ。いい顔ばかりしてみせる必要なんかない。そのことはぼくも機会があれば書いていきたいと思う。だが、これらが競馬場に持ちこんだ「その対象がなんであれその喜びを感じたい・共有したい」という鮮烈な欲望、自体を否定することはできない。「ナカノ・コール」は戦う相手も見えない平成の日本の若者にとつての(無意識ではあれ)天安門やベルリンの壁に向かつての叫びなのではないかとぼくは思っている。若者からはじまった「ナカノ・コール」にはいつの間にかおじさんたちも唱和していた。競馬にも外部から波が押し寄せつつある。その「外部」は外国産馬だけではないだろう。だが、最後にもう一つだけ付け加えておこう。ダービーが終わり、そして群衆の喊声も尽きた後の東京競馬場は、いつものように広々とした草原のたたずまいを見せていた。この風景だけは、競馬の続くかぎり終わることがないのである。写真・久保吉輝

ぼくの予言

高橋源一郎

